



## 決断と行動、動いてなんぼ

金城 朱美（ドイツ経験文化学、口承文芸）

最近、論文執筆やシンポジウムでの登壇のお願いなど、予期せぬ仕事が増えしてきた。そして、「いつか来るだろうな」と思っていた原稿の依頼がついに来た。この「マンスリーコラム」である。私は口承文芸を研究しているからか話をするのは好きで、講義や研究発表で「話す」ことに抵抗はない。しかし、「書く」となるとなかなか筆が進まないこともある。ドイツ語だとうまく文章が書けるのかということもそうでもない。しかし、私がドイツ語を話していると、「顔を見なかったらドイツの人が話しているみたいだ」と、褒められているのかどうか、微妙なことを言われることがある。

さて、このコラムに何を書こうか迷った。同僚のコラムを参考にしてみると、うまくまとめられていて、みなさんの個性がにじみ出ていて面白かった。はてさて、私はどうしようか。堅苦しくドイツ民俗学（経験文化学）について書くのがいいのか、それとも大阪人らしく読者に笑いを誘うような内容にするのがいいのか。コラムだから、この中間を目指すことにした。

「先生は、なんかフワフワしている」と学生に言われることがある。これも褒め言葉なのか、どうなのかわからない。実に微妙だ。私は、おっとりとしていない。どちらかというときっかりで、物事をさっさと済ませようとする。そして「動いてなんぼ」と思いながら、さまざまな決断をし、行動に移してきた。そんな私について書くことにした。ぜひ学生さんに読んでほしい。

子どもの頃を振り返ると、惨めな思いをしたことが何度もあった。だから、自分でお金を稼げるようになり、自立して生活できるようになりたかった。高校で知り合った友人とスポーツ系クラブに入部した。箸が転んでもおかしい頃だったから毎日がとにかく楽しく、たくさん笑いながら過ごしていた。しかし、高2の夏にひよんなことから、部活に足が向かなくなった。部活をやめると、同時に友人も失い、悔しくて悲しくて仕方なかった。「今度新しく始めたことは絶対に途中でやめない！」と決意した。

小さい頃からなぜか外国に興味があり、英語が大好きだった。将来は英語を使って、世界を駆け巡るようなキャリアウーマンになりたいなと思っていた。東西ドイツが統一し、「これからはドイツ語の時代だ！」と勝手に決めつけ、ちょうどその頃に読んでいたドイツの作家の小説をドイツ語で読んでみたいと思い、大学でドイツ語を学びたくなった。しかし、経済にも興味があったので、経済学部と商学部も受験してみた。結果は不合格。のちにその大学でドイツ語を教えることになるとは、人生いつどこでどうなるのかわからないものである。

さて、ドイツ文学科でドイツ語を学んだのに、卒業するまでに一度もドイツに行ったことがなかったのは私一人だった。友人からドイツの話を知ったときに、惨めな思いをした。大学卒業後に就職することも考えたが、大学で出会ったグリム童話の研究を続けてみたかった。そして何よりも、ドイツに行ってみたかったので大学院へ進学することにした。修士課程1年の夏に初めて、バイト代を貯めてゲッティンゲンで8週間の語学コースに参加する。クラス分けテストの後、面接官に「あなた、文法はわかるのに話すのはさっぱりね」とストレートに言われた。この言葉が私の胸にグサッと突き刺さり、悔しくて「絶対にドイツ語を話せるようになるぞ！」と決意した。

帰国してからもドイツ語を書いて話す機会を作り、ドイツ語の勉強を続けた。幸いロータリー財団の国際親善奨学生に選ばれ、修士課程修了後にドイツへ留学できることになった。このことを父に報告すると、父は「女の子が博士になると結婚できない」と決めつけて反対した。しかし、私は「なんぼでも結婚相手はおる。結婚だけが人生じゃない!」と、父の意見を一蹴した。

こうして、当時口承文芸研究のメッカとも呼ばれていたゲッティンゲン大学の博士課程に進んだ。ドイツの文化を学ぼうと民俗学を主専攻にし、近代ドイツ文学と日本学を副専攻にした。毎日が忙しく大変だったが、一緒に学食に行ったり、家に招待してくれたりする友人が何人かできた（彼女たちは今では、私のかけがえのない宝物である）。数年で帰国するはずが、ドイツで結婚、出産し、育児をしながら学位を取得し、研究と仕事をする事になり、20年近くドイツで生活していた。語学力があると、生きていくために役立つアイテムが一つ増え、視野が広がり人生の選択肢も増える。しかし、それだけでは十分ではない。+αが必要である。ドイツではできなかったことを実現するために一大決心をし、2018年3月末に大阪に戻った。そして、2019年4月からは富山に移り住むことになった。

戦争さえ起らなければ、日本とドイツを自由に往復できると思って帰国を決めたが、パンデミックが起り、移動の自由が制限された。これまでの日常が失われ、新しい形の戦争状態のようであった。コロナ元年には思いもよらず、横断歩道を歩行中に前方不注意の車に轢かれた。0.1秒でも遅かったら、歩くことすらできなかった。それからは考え方が変わった。明日死んでもいいように、日々後悔することがないように過ごすようになった。生きていることにありがたさを感じ、家族や友人など私のことを支えてくれる人に感謝する気持ちが強くなった。そして、やるべきことを積み残さないようにしている。しかし、最近は積み残しが増えてきて、埋もれそうになっている。それでも24時間戦わず、寝るときは寝る。時間の使い方を工夫するようにし、いかにストレスをためずに穏やかに、心身ともに健康に過ごせるのかも研究し実践しているが、続けるのが難しい。なんといっても体が資本です。世の中の人びとが豊かな生活を送れるようになるには、何が必要なのか。幸福度の高いヨーロッパの人たちの日常生活からヒントをえようと、最近は文化遺産とまちづくりについて研究し、どんなことやどんな状態を「幸せ」だと語るのかに興味がある。そろそろ研究成果を文字化して、発信しなければならない。

ところで、最近の学生を観察していて思うのは、「空気を読む力」が半端なく高くなってきていることだ。授業中に私が何か聞いても答えようとしない。多数決をとろうとしても、周りが手を挙げているのか、まずは様子見してからしか手を挙げない。はっきり言ってこれはおかしいし、危険だ。「周り」が正しいとは限らないし、周りの目を気にばかりしていたら、自分の目標に向かうこともできなくなるのではないだろうか。自分のことは自分で決め、自分で責任を持つ。たとえ失敗しても、失敗から学ぶ。トライ&エラーの繰り返しがあるからこそ人生に厚みがでてくるし、人生を楽しめるのではないか。大きな決断ができるようになるためには、まずは日々小さなことを決断できるようにならなければならない。

グリム童話や日本の昔話の主人公は、勇気をもってある行動をすることを決め、実行して幸せをつかんでいる。たとえば「ヘンゼルとグレーテル」のグレーテルは、パン焼き窯をのぞき込む魔女を窯の中に閉じ込めることで、魔女の監禁から逃れて、ヘンゼルを開放して宝物を持ち帰る。桃太郎は鬼退治に行くことと決めて鬼ヶ島へ向かい、鬼たちを懲らしめて、村の宝物を奪還し帰宅する。やることをカチッと決めて、勇気をもって行動するとうまくいくことを昔話は示唆している。

気になることがあれば調べて考え、答えを導きだそうとする。食べ物でもなんでも本物に触れ、消費する機会を増やす。見たいものがあれば、自分で足を運ぶ。百聞一見にしかず。会いたい人

がいれば、手紙を書いたりメールを出したりして、場合によっては飛行機に乗ってでも直接会いに行き話をする。失敗したり、期待外れだったりすることもあるけれどもへこたれず、前に進む。七転八起。こうして今の私ができていて、まだ完成形ではない。学生みなさんにも自分で考えて行動し、さまざまな場所にでかけ、いろんな人ともかかわって視野を広げてほしい。学生時代に自分の進む道を見つけ、それに向かう勇気を持ち、目標達成のために行動（努力）してほしい。自分が動くと人生も動く。だから「動いてなんぼ」なのです。進取果敢。それは、長い道のりかもしれません。しんどい時もあるかもしれません。疲れた時に話を聞いてくれる人が、一人でもいてくれると十分です。自分もその人の話を受け止めることができると嬉しいものです。友達は100人も必要ない。

と、長文になってしまいましたので、今日はこれぐらいにしときます。どうぞ、気軽に教員室にお立ち寄りください。